

- 1 派遣期日 平成23年10月30日（日）
- 2 研修先 学校名 横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校  
所在地 神奈川県鎌倉市雪ノ下3-5-10  
<http://www.kamajhs.ynu.ac.jp/>

## 3 研修内容

「思考力・判断力・表現力」を育てるための指導と評価  
～「今、求められる力を総合で育てよう！」～

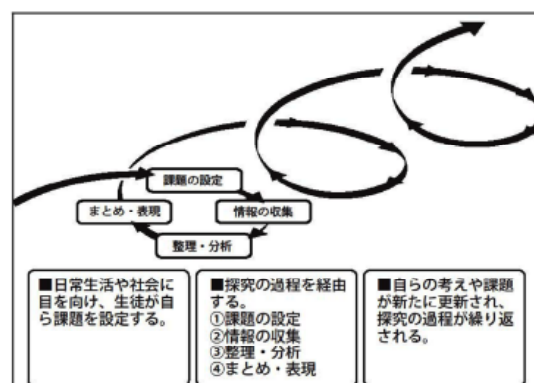
## (1) 学びの質を高めるためのポイント

- 探究的な学習としての充実  
生徒一人一人の内面に芽生えた課題意識を出発点に、それを追究する主体的な学習が展開され、さらに新たな課題意識が芽生えるような学びを実現する。
- 育てたい資質・能力・態度の明示  
学習活動を通して、どんな資質や能力を育てたいのか。あらかじめ明示することで、一貫性のある学びを実現する。
- 体験活動と言語活動の充実  
体験活動の事前・過程・事後に、それぞれ適した言語活動を組み合わせて、生徒一人一人の学びを充実させる。
- 教師の専門性を発揮しやすい環境づくり  
各教師がもつ専門性を発揮しやすいような体制づくりで、探究の質を深める。

## (2) 横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校における「探究的な学習」の流れ

| 探究的な学習の過程 | 単元内の学習活動例 |                                |
|-----------|-----------|--------------------------------|
| 課題の設定     | 「つかむ」     | ガイダンス、フィールドワーク、個人課題の設定、学習計画の立案 |
| 情報の収集     | 「さぐる」     | 調査項目の設定、予備調査、現地調査              |
| 整理・分析     | 「みがく」     | 情報の整理や分析、中間発表会、相互評価活動          |
| まとめ・表現    | 「ひらく」     | 学習発表会（全校）、研究冊子作成、学習成果の具体化      |

横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校では、探究的な学習の流れに合わせて、学習を「つかむ」「さぐる」「みがく」「ひらく」の4段階で構成している。これは、生徒が自分の学習の進捗状況を把握しやすくすることがねらいだが各段階における指導の仕方を学年内でそろえやすくして、教師が指導性を発揮しやすくするという意味もある。全体計画には、単元ごとに各段階での指導内容を整理してあり、この内容に沿って学年ごとの方法で指導にあたる。また、各段階では、言語活動を適度に取り入れた丁寧な学習になるよう配慮している。



【探究的な学習における生徒の学習の姿】  
(学習指導要領解説P16より)

## (3) 評価のポイント～3年間で育てたい資質・能力・態度の整理

3年間の総合的な学習の時間を通して、生徒がどのような姿になってほしいのか、どんなことができればよいのか、どんな視点をもって思考・判断できればよいのか、どんなことに関心を向けてほしいのか。これらを具体的な資質・能力・態度の目標として設定して

いる。キャリア教育の視点や、情報教育の視点を取り入れ、次の3つの資質・能力・態度のバランス良い育成を目指している。

■ 育てようとする資質・能力・態度

【問題解決能力】

生活上の問題解決や、将来に向けた自己磨きを、計画的・主体的に実践する能力

【情報活用能力】

様々な情報機器や伝達手段を活用して、情報を適切に収集・処理・発信する能力

【人間関係形成力】

社会人・職業人として必要なルール・マナー・モラル等を身につけ、これを生かしてコミュニケーションを充実させる能力

(4) 生徒に芽生えた課題意識を、次の学習課題に設定する授業づくり

【授業の事例】

① 第1学年前期地域学習

身近な地域（鎌倉）の歴史や伝統について追究するとともに、探究の基礎力を養う学習と位置付け、情報活用能力の育成に重点を置いている。3年間の最初なので班課題を追究させる、鎌倉の歴史に関わるものとして、鎌倉市内の寺院・神社等の建物、史跡、縁のある人物等を学習対象とし、歴史的な視点で迫れる課題を設定させる。3年間を見通した基礎的な知識としての行動計画の立て方や情報収集の仕方（図書室の閲覧方法、インターネットによる検索方法等）、調査先へのアポイントの取り方等の練習を行い、班ごとに調査活動に取り組む。学習発表会に向けて、発表の練習ごとに相互評価活動を行い、そこで出された評価（内容面・技法面等）を次の発表へとつなげる。

② 第1学年後期学問系探究学習

教科等の学習や、地域学習で生じた興味・関心に基づいて個人課題を設定し、教科色の強い講座（国語系、理科系、技術系等）に分かれて探究的な学習を進める。教科色を強くすることで教師の専門性を生かしやすくなり、学びの質を高めることができる。また、生徒が感じた疑問から学習が発端することで、学びの螺旋が生まれ、生徒の内から学習意欲が湧き出てきて、学びの質が高まる。

【個人課題の例】

- ・国語系講座…雑誌作成、本の販売システム。
- ・技術系講座…コントローラのしくみ、地上デジタル放送のしくみ。

(5) 学習発表会の実際

全校生徒が各教室を自由に行き来して発表を聞き、意見交流をしていた。異学年が交流することで、3年生から1・2年生へは、探究する姿勢に関して鋭い質問がとび、1・2年生の生徒は、3年生の発表を見ることで、発表の工夫点や課題を追究する際のポイントをより深く学ぶことができた。特に、一旦調べ学習が終わると教師から「もうひと探究」という声をかけ、更に調べたいことを考える時間を設定していたため、生徒はより深い内容にふみこんで意見の交流をしていた。

4 感想

今回の研修で、学習のサイクルを作ることの大切さ、「なぜ？どうして？」という生徒の探究心を耕す指導の大切さを実感した。学習のサイクルについては、「疑問→課題設定→調査活動→まとめ→発表」を1つのサイクルにしていた。第2サイクル終了時の発表では、全校生徒が自由に参観する形を取り、異学年が交流し、学びを全体で共有していた。ここでの異学年の生徒との意見交流により、探究姿勢が浅かった生徒は質問に答えられないこともあったが、この経験を積むことで更なる探究心が芽ばえ、教師・生徒がともに作る学習が形成されているのだと感じた。横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校では、この形で総合的な学習の時間を行うのは4年目ということであったが、生徒はこのサイクルを有効に活用しつつ、学びを深めていると感じた。本校でも中間発表を行い、2サイクル制での実践をしていたが、今後は「なぜ？どうして？」という生徒の探究心を耕す指導に努めていきたい。